

---

# こわい話

長月 夕子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

こわい話

### 【Nコード】

N3358E

### 【作者名】

長月 夕子

### 【あらすじ】

「こわい話をするわ。そうとててもこわい話」

## こわい話

トイレの話をするわ。

私が東京へ出てきて最初に暮らした部屋は、阿佐ヶ谷で1K家賃3万のアパートだった。アパートといっても大家さんの敷地内に建てられた離れの2階、201と202しかないような小さな建物で、202は大家さんが物置に使っていたから実質住人は私だけだった。お風呂はついていなかったけれど、すぐ近くに銭湯があったし、東南角地で風通しも良く、大家さんもすごくいい人だったから私はその場で決めた。アパートの外階段からは新宿副都心が見えて、東京で暮らしているんだなあと実感したものだ。こうして私の東京暮らしは順調にすべりだしたように見えた。

このアパートのトイレは小さいながらもとても綺麗にしてあった。古いアパートにありがちな和式のトイレだったけれど、ちゃんと磨かれていてタイルもピカピカ。難を言えば少し狭かったけれど、そんなことは気にならなかった。実際に使ってみるまではね。

あなた、狭い和式トイレって想像つくかしら？便器を跨いで座つたとするわね、そうすると鼻先ギリギリにタンクがあるのよ、まさに目の前。うっかりしたら頭をいやと言うほどタンクにぶつける破目になる。だからどんなにあわていても、自分がしゃがんだ時にタンクへ頭をぶつけないよう気をつけなければいけない。そうかと言つて少しでも後ろへ行こうものなら、ひっくり返る事になる。足を後ろに下げるスペースは無いのよ。要するにすぐ後ろはドア。残念ながらドアノブは少し壊れていて、鍵がうまく掛からないからちよつと押すと開いてしまう。私の言っていることがわかるかしら。例えば、タンクをよけようとしてちよつと体を後ろに反らした瞬間、運悪くバランスを崩すと体ごとドアにぶつかってしまふ。さらに運が悪いとドアは開き、私はその情けない格好のまま、玄関に投げ出されてしまふ。というのも、トイレは玄関のすぐ脇にあったから。

玄関は昔ながらのコンクリートのたたき。そのまま後頭部からたたきに落ちたとしたらどうなるかしら。打ち所が悪かったら私の意識がなくなるでしょうね。まさにかえるをひっくり返したような体勢のまま、私は誰かに発見されることになるわ。

どうしたの？これが怖い話かですって？そうね、あなたにはわからないかもしれない。

けれど恐怖って大概、他の人には取るに足らない、くだらないものだったりするの。そしてそういう恐怖に、人は簡単に捉えられてしまうものなのよ。

**続 こわい話（前書き）**

一話目を先にお読みください。

## 続 こわい話

じゃあ、俺もトイレの話をしよう。

俺が東京へ出てきたときもやっぱり金がなくて、最初に住んだアパートは巣鴨で三万だった。もちろん風呂はないが六畳だし、三万のレベルじゃ上のほうだと思うね。二階建ての一階に俺は部屋を決めた。二階は家賃が四万だったんだ。なぜかという二階にはトイレがあつて、一階は共同トイレだったからさ。共同トイレという忌避するかも知れないけど、よく考えたら個人的なトイレを持つたことは一度もない。実家だってじいちゃんやばあちゃん達と一緒に計八人で一つのトイレを使っていたんだから。それに一階には俺と、隣の笹本さんしか住んでいなかったから、純粹に二人で一個のトイレだ。申し分ない。それに、当時の一万円って結構重いものだろう？

笹本さんとはどういうわけか俺がそのアパートで暮らしている間、一度も顔をあわすことはなかった。挨拶に行っても大体留守だったし、ほとんど見かけたことがなかった。

さてさて。トイレは和式で狭くはなかった。むしろ広い方だと思う。きれいにしてあつたし、特に不自由を感じなかった。君と同じように、鍵が壊れていた点を除けばね。

君は実家のトイレをノックすることってある？俺には残念ながらそういう習慣はなかった。それで困ることはなかったしね。笹本さんにもそういう習慣はなかった。つまりこういうことだ。

用足しに立つ。俺はトイレのドアを開ける。そこにはすでに笹本さんがいるわけだ。「あ、すみません……」と俺は言い、「あ……いいえ……」と笹本さんの背中が答える。逆も然りだ。「あ、すみません……」と笹本さんが言い、「あ……いいえ……」と俺はトイレのタンクを見つめながら答える。俺らは顔を合わせたこともないのに、お互いの排便シーンを見せ合い続ける結果となった。学習す

ればいい。ノックだ。だけどうっかり忘れちまう時に限って、笹本さんが入っているんだ。

危険なトイレは確かに個人的かつ内情的な恐怖だろうけど、使用中のトイレのドアを不意に開けられるのも、開けてしまうのも、なかなかの恐怖体験だったよ。

こうして話してみるとやっぱり君とは気が合いそうだ。この店のキールもなかなかいいけど、すごくおいしいワインを出すところを知ってるんだ。これからどう？なんだ、時間を気にしているのかい？それなら心配要らないよ、君のマンションの近くなんだ。そこから君の部屋がよく見えるんだよ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3358e/>

---

こわい話

2010年10月15日22時03分発行